

うき草に火を埋たるほたるかな
童子かたはらに有て曰死螢なるやと宗祇驚き

池水に火をうつなみのほたる哉

此童子何ものぞや

〔骨董集 上編上〕駒形の螢

江戸雀延寶五年印本十之卷淺草駒形堂の條に云、中略船つきにして出船入船のありさまは遠浦の歸

帆とや申さん、九夏三伏のあつき比は、風すゝやかに吹おとし、とびかふ螢水にうつり、勝景かぎ

りなき所なりとあり、繪を見るに堂のかたはらに、樹木ある體をかけり、又江戸名所記寛文二年板の

駒形堂の圖を見るに、木立蔭くさむらなどありて、螢もをるべき體也、

焦尾琴元祿十四年板こまがたに舟をよせて、此碑では江を哀まぬ螢哉、其角

かくいへるも、眼前の體なるべし、今は所せきまで人家立つゝきて、螢に化すべき草だになし、

略○下

〔嬉遊笑覽十二禽蟲〕螢合戰は、狂歌咄に、卯月の末つかたこ、宇治は螢の集りえならぬ興を催せり、餘所

の螢よりは、一きは大にして、光りことさらにみゆ、世にいふ頼政入道が亡魂にて、今も軍する有

さまとて、夜に入ぬれば、數十萬のほたる川面にむらがり、或は鞠の大き、或はそれよりも猶大に

丸がりて、空にまひあがり、とばかり有て水のうへにはたと落てはらく、とつけてながれ行こ

と、幾むらとも限りなし、正章千句に、サテ纏網をもちかよふ夏川、螢こよといふ聲波に響きわたり、續

山井に、火廻しがせたから宇治に行ほたる、衆下和漢三才圖會に、註略石山の溪に螢多して、常のよ

りは大なり、此所を螢谷と呼、北は勢多の橋南は供江ヶ瀬に至る、其あはひを群がり飛こと、高さ

十丈ばかり、火燄のごとし、又數百集りて塊ることあり、大かた芒種の後、五日より夏至の後、五日